

沖電気争議団は私にとって何だったのかと問われたとき私はこう答える。

人間らしく生きたいと願い、それをばむ者へ敢然と挑む姿にあこがれてしまったからだ。

それは彼ら争議団の人々がなぜ八年間もたたかい続けたのか、という問いかけの答とも共通するものかもしれない。今の世の中、安易に生きようと思えばいくらだって道はある。

だが、彼らの選んだ道は一番厳しい道を選んだのではないか。

社会の不条理に、不正に声を上げ、それにいどむ事がどんなにむずかしい事か。でも、それがもつとも人間らしい生き方につながるのではないか。

だからこそ、沖電気争議団のたたかいは全国に共感をひろげ、彼らの生き方を共有する人々が増え続けたのではないのだろうか。

私もその一人だ。

私のかかわりは争議の始まった七八年十一月からだ。当時、民主青年新聞のカメラマンとして取材に入った。解雇というものの経験がないだけにさっぱりわからなかった。ただ、不当な理由(それもほとんど理由にもならないデータラメさ)で工場の外に放り出された人々への同情と非情な

会社への怒りから夢中でシャッターを押し続けた。二十八歳の時だった。

当時は今よりもずっと青年だったからより正義感も強く、多感な時代であった。

争議の当初、就労闘争は「解雇は不当だから工場に入れろ」と門前で守衛やかり出された職制と一戦交えて終るといいう状況だった。

ある朝、仲間が引き上げたあと、一人じつと金網ごしに工場の中を見つめる青年労働者の後姿があった。荒木君だった。彼らがどんなに無念だったか。きつともどつて来るからな」と無言の背中は語っているようだった。

以来、シャッターを押すこと、争議団の人々の姿を記録する事が私のできる彼らへの連帯と支援の行動と思いつづけた。

争議が始まって五年、私の子供が三歳になった頃から、争議団の集会での子供たちの姿が目につきました。

以前から見かけた光景だったが気にもとめていなかった。一人の子をもつ親としての目で沖電気争議を見るようになったのかも知れない。

壇上で自由奔放に走りまわる子供たち。ねむい目をこすりながら母親の手を握ってデモ行進をする子供たち。私は、沖電気という資本の悪らつき、非情さを感じざるを得なか

った。

争議団の事務所はたたかいのきびしさとは逆に、いつも明るく、笑顔がたえなかった。とても暖い雰囲気を持っていた。

一人ひとりの笑顔は魅力的だった。その笑顔とどっこい生きていく。ことが会社にとって大きな脅威だったのかも知れない。

それがあったからこそ、八年間もたたかい続けられたし、私が撮り続けられたのだと思う。

争議が解決しそうだという話を聞いたとき今まで撮影したフィルムを見直してみた。

五百本近いフィルムは私の沖電気争議団とのかかわりのすべてだ。

沖電気争議団の記録の一部であると同時に私の生き方を記録することにもなった。

フィルムを見終って、不十分さがたくさん目についた。それはそのまま自身の生き方にも返ってくる事だった。

その不十分さを気づかせてくれたのは沖電気争議団の一人ひとりの生き方だった。

この写真集発行を機によりいっそう人間らしく生きる事とはなにか、このつきない疑問を解決するために努力したい。

森住卓

生き方が試されて――